

体操活動及び「いいからだの日」アンケート結果

【1】 あなたの地域の体操活動

表一 体操活動の認知度

	1998年	2010年
① 地域の体操活動は盛んである	3.0	3.9
② 地域に体操指導者がたくさんいる	2.7	3.6
③ 地域に体操クラブや組織はたくさんある	2.7	3.8
④ 地域で体操の指導者研修が盛んに行われている	2.2	2.7
⑤ 地域の体操の認知度は高いほうである	1.5	3.8

1998年に一般体操を「競技を目的としない体操の総称」として、一般体操活動の現状調査を行った。この時、体育方法専門分科会体操研究会会員93名にアンケート調査し、42名から回答を得た。

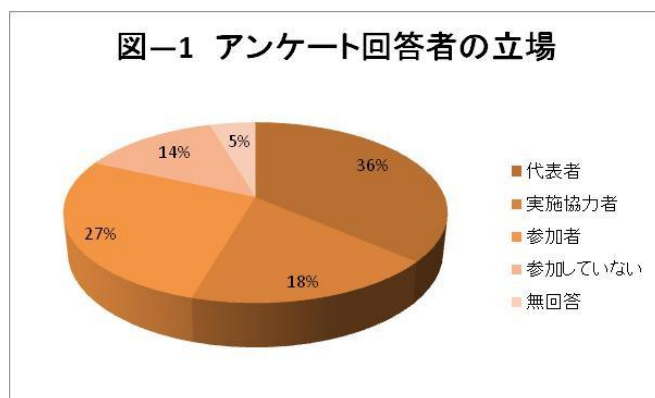
今回は日本体操学会のインターネット会員192名にアンケートを依頼し、22名からの回答を得た。

結果は表一のように、1998年には活動評価が3.0を超えなかった。しかし、各地域で体操活動が活発化し、体操活動が盛んであるは平均3.9、体操指導者(3.6)や体操クラブや組織(3.8)も顕在化していることがわかる。が、体操活動の研修機会(2.7)はまだ少ないといえる。本学会の趣旨である、“動いて学ぶ”という機会が少ないという現状と動いて学ぶ機会を求めている指導者の実態があるのではないかと推測できる。

また、体操学会の成果で、体操に関する研究活動や広報活動の結果、認知度(3.8)も上がっているように思われる。

【2】 「いいからだの日」参加者アンケート

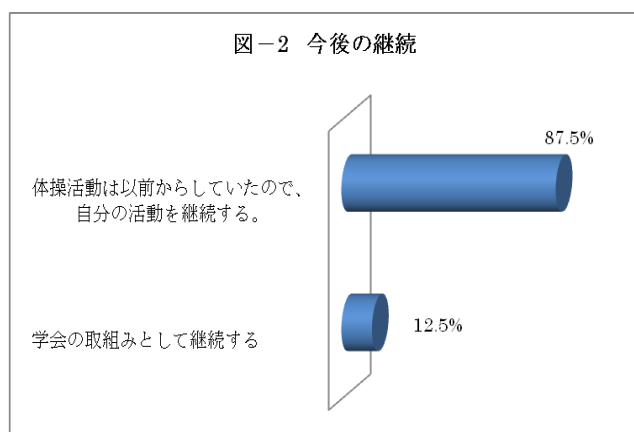
図一 アンケート回答者の立場



アンケート回答者の54.6%が「いいからだの日」に参画していた。

立場	比率	(実数)
代表者	36.4%	(8)
実施協力者	18.2%	(4)
参加者	27.3%	(6)
参加していない	13.6%	(3)
無回答	4.5%	(1)

図二 今後の継続



「いいからだの日」の今後の継続については体操活動の認知度も高まってきたので、各地に根付いた活動の内容の充実を図る次の10年を目指す時期となってきたように思われる。

日本体操学会の取組として地域で行う場合に体操学会がどのようなネットワークを持ち会員のメリットに繋がるのかも課題である。

図-3 「いいからだの日」取組みの成果

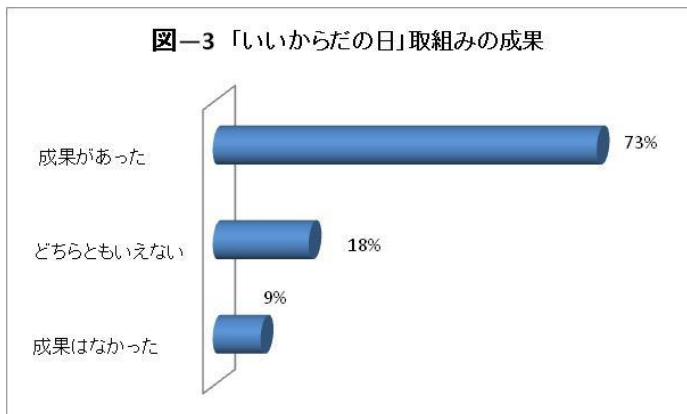
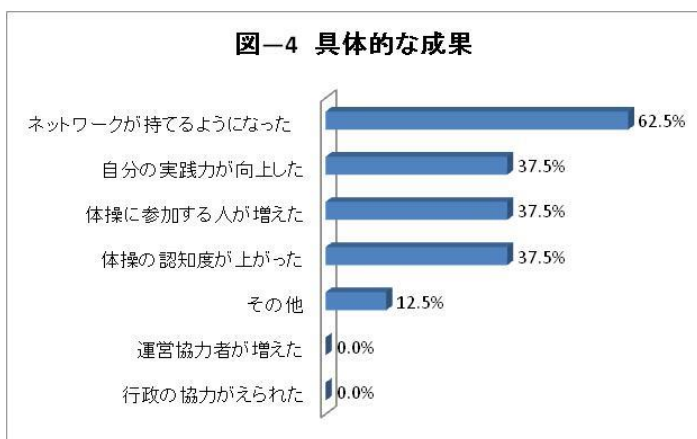


図-3 は「いいからだの日」の取組みの成果で、成果があったと答えた人は73%で、具体的な成果の1位はネットワークが持てるようになったことである。

これからの社会において、ネットワークは非常に重要なキーワードであり、体操活動をひろげることで人や組織のネットワークが広がることは体操の認知度を向上させることにもつながり、指導者の指導力の向上にもつながる。

図-4 は具体的な成果を棒グラフに示した。

図-4 具体的な成果



指導者としての実践力の向上や体操への参加

者の増加も、今後の介護予防などの社会的な課題解決に繋がることであり、現在の活動のネットワークをさらに広げ、無理のない活動を継続していくことが重要であると思われる。

図-5 では、「いいからだの日」の取組みを始める前と取り組んだ後の体操活動についての主観的な変化を尋ねた。

継続して実施することで、参加者が元気になったと答えた人が50%、体操が活発になったと思う、体操参加者が増えた、体操以外の活動も活発になった高齢者の参加が増えた、保健所と関わるようになったなどの項目については指導者の積極的な働きかけがあったことも影響していると思われる。

特に高齢者の参加が増える要因としては、高齢者が参加できるプログラムが提供できているということであろう。今後このような実践の具体的なプログラムとその成果の公表が期待される。

図-5 取組み前後の体操活動の変化



図-6 問題点

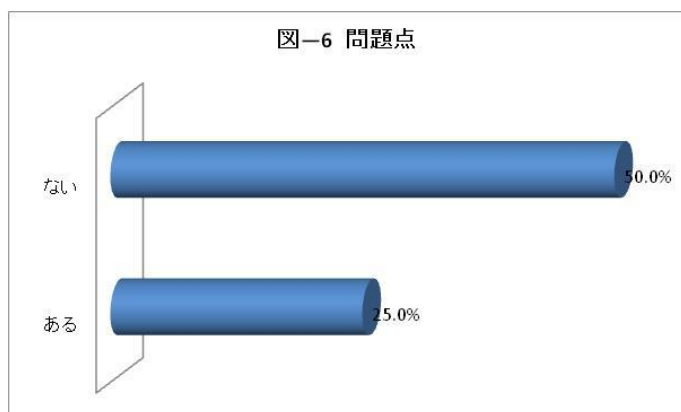


図-6 は「いいからだの日」の実施によって見えてきた問題点であるが、ないと答えたものは50%であるが、あると答えた人の回答は、今後我々も直面する課題であるので紹介する。

「指導に力を入れると、研究ができません。大学の非常勤をしていますが、研究論文を書けなくて、それが、実施の報告で少しはおぎなえろと思ひ、開催と掲載の為の報告をし、社会教育課に提出していましたが、CDになってからは、提出しても解ってもらえないの

で、報告も忘れていきますし、その気持ちが無くなりました。もちろん、研究論文が、ベストなのは承知していますが、体操学会では、そういった地域指導者の実績も評価していただけると聞いて入会しました。今後も、応援していただけると嬉しいです。また、アンケートをいただき、また、ちょっと頑張ってみようかな？という気持ちがわきました。私どものチームは、親子体操を始めて20周年になります。12月には記念行事を開催いたします。今後とも地域体操に力を入れていきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

体操学会には、遠いのと、地域の指導があり、休めないで、今までで1回しか参加しておりません。申し訳ないと感じていますが、地域で行動している指導者の立場もご理解頂けると幸いです。これからも体操学会が盛況でありますよう、お祈り申し上げます。」

また、このような活動を継続的に運営する協力が育っていないということも回答者から挙げられている。

【3】「いいからだの日」10年間の総括として

いいからだの日の代表者の62.5%は体操の発表会をしているが、筆者が今年の体操祭を終えて次のような感想が出た。「同じ動きを、同じ隊形で演技するグループが多いので、見ていると飽きてしまう」というのである。

健康づくり、介護予防の観点から、年に一度の発表会は高齢者にとって1つの楽しみとなっている。しかし、マンネリ化も否めない。参加して感動を与えられる指導力を持つ地域のリーダー育成が必要である。

加えて、75%は既存の活動を「いいからだの日」として企画している。このような場合は実施内容、参加者、参加人数など全般に渡って変化は無い。「学会が関わっていることで多少なりともメリットがあればよいのだが、実施するにあたり何の影響力も無い。特に実施内容については、助成金申請に通るための手立てを優先している。」との回答もみられた。

さまざまな立場でのかかわりがあり、それでもあつという間に10年が経過し、「体操の技術度の向上、及び体操の理解度が深まった」や「10年間お疲れ様でした。体操界に強烈なインパクトを与えた功績は大きいです。」などの記述がありました。

子どものからだも高齢者の健康もあぶない！危機的な状況を感じた取組み「いいからだの日」の10年について、参加団体にアンケートをした結果、大きな収穫は体操参加者が増加したこと、体操の指導者だけでなくジャンルの異なる人とひと、人と組織、組織と組織のネットワークが広がったことです。しかし、5年目からインターネットに頼り、2006年は年度当初は呼び掛けだけとし、インターネット上の書き込みのみとしました。その弊害は実に大きいものでした。体操365日の体操カレンダーに迷惑な書き込みが増えて、それを削除する作業が増えました。いつでも書き込みができるにもかかわらず、忙しいからつい先のぼしで情報集めが不作となりました。書いてくれるだろうという予想はずれて、人とのつながりも希薄化しました。CDになったので便利かという、紙での報告書ほど見ていただけなかったという声もありました。

現在、いいからだの日は継続されているのですが学会としてまとめることはしていません。そこで、皆様と今後10年間、私たちは何を目標として活動をすべきかを考えたいと表彰することを提案し、まとめとします。

交流委員会 吉中康子